左門藤原氏孫ハ左門一西ノ長男
ノ子ニシテ新二郎重氏ト云フ
天正十八年二月十四日没ス
ル
東照宮ニ仕ヘ奉リ御側ニ侍ス
文禄四年十月従五位下ニ叙シ
采女正ニ任ス慶長七年家督ヲ継キ
左門ト称シ元和二年七月隠居

侍ることゝなり摂津國尼崎よりとゝ
領地五万石を賜ひ帰り作ることゝ
て此地に城を築く寛永十一年
七月従四位下に叙せらる同十二年
七月義濃國大垣に移し五万石を
加へられ十万石を領し慶安
四年十一月致仕し剃髪して常閑
と号し明暦元年二月十四日卒す

時に年七十九なり

一 戸田左門氏秋慶長十九年大坂陣に
供奉して摂州に赴んとせしに
台徳公脇坂中務大輔に謀り関東藩扞
の所なれい力戦の功に賜はんと命せ
らるゝや遂に脇坂侯と脇坂侯と
なるべし 近代諸士伝略

一 戸田左門氏秋大坂の事起るべきと

大所御都よりのほらせたまふと聞て
矢橋の浦まで御迎ひ参らせ申脇
とまりの書我身に御をうけ給まつり
てこの脇くとまりける　藩幹譜

一　戸田左門殿尾張城をのころ家中に
侍るもの具をとり頭り城中の古義ふ
入給ふ扨一とせ伊東浦より江戸へ
取よせ申右出張代の大名元より御付られ
り其年の入目金銀左門殿家中元へ取
かへ申言しるるるその勘行言へかくり
右の金銀を侍中こう出るきよ左門
殿申やうい返進の金悉侍中へ出し
給り面くよく金目を書付名判りる
されりへものく箱へ持参をつうひ先ひ
中きくるる君殿うこ出見のわるかとく結
付自然急用のとき用事よをひるへ

と申候ともかろうゟ及ひ候先
のうち身上厳しく成ゟ人まて暇乞仕
是ハ暇出しゟ
ゟ貝号を申返しおされゟ貝号の出
うち申暇出申さるゟ一とせ信京陣の附
左門殿江戸に申上合よつて申聞へ
仰付られ江戸より大坂へ帰城ゆし
の間用意ハ仕てそのまゝ大坂へ到着

出仕皆もほう事に仕ゟ大坂まて尾張
のことくにおされゟ
ゟて大坂へ申出ゟ
一左門殿尾張に申入ゟ馬百匹申買ゟ
て尾張ゟ兵庫まての里ゝに申渡け
是ハ召まて常ゝ法度殿ゟ用向のとき
を渡しゟやうゝと申中付ゟ
中ゟ

同上

南見集

同上

一

左門殿尾張より入りころ尾張大納言様
有馬へ出陽治おされ左門殿代見まて
出迎に出参りて門元の馬い見まるこ
やへ出迎へ走るへくのほとるとて馬
借へ中へきと出中ようまて出供の元侍
みなへ石護殿へ乗て迎へ中さる首馬へ
の出見回の使者者ようつるまて
尾張そよう松るとて見中より大納言様

川端の茶屋そて出一献進上おされ給
まと出中上り馬る八十匹そろう同様の
なるへきく馬具まるいい品の中間衣
類羽織袴うみまて同こへの深るふ
て鞍い黒塗前後銀紋丸い象眼おら
あとりり心走へ濃淡黄かさま
銀みる鞍へへくりつる梨子地ろ鞍
然毛のあふり一足もこれるくより 日上

一 戸田一西ノ橋男氏孫内加増して十万石
を賜る氏孫なしあい酒井左衛忠次
附属仕て組下のやうなりけるに氏孫十
万石なりし後も忠次のかしらとハ一生
敬せしなと人々感しける 明良洪範

一 寛永十五年の春肥前国唐津の逆徒近
村の内使として松平伊豆守信綱ともに
発むかいて九国ヲ軍勢を下知して

攻ほろぼす 藩幹譜

一 寛永十四年十一月肥州有馬の一揆起る
ときに氏孫松平伊豆守信綱と上使と
して彼地ふ赴く浮橋陣のとき御前よ
り出されし出陣兵ヲ率して常に傍へ居る脇指
蜂須賀三家 八寸八分 を賜ふ 近代諸士傳畧

一 寛永十八年八月二日
厳有公御誕生のとき氏孫子孫蕃衍

なるを以て仰せ付られ命じて内脇差は
竹鉋を献せられる間て内刀（備前長光）を傷
ハ（同上）

一 戸田左門殿内國義濃の大垣に鶴と
同量大きく或ハ江戸へ取寄せ仕候
鶴同の者不川にて差遣まいらし
不川にこの鶴不宮ちよりける彼をの
迷惑なるべ内殿へ新古の通りと

中上はる打前内心易き内容なる内度ハ不
取次の者取出中上はまい左門殿大きる
隠之その者を白洲へ呼寄せをのを
大事の鶴を殺しハよくも殺なし
鶴い千年といいさるる千年いきるものと
殺られいとの仕る罪大罪ふいなるし
いるるとと云うるる式をのふるるる中ら
を陸分大切よ住ハ鮮同水同前の通り

仕ル形ニおちゆかいこと〳〵今年千年目
ニも中度ハやゝ〳〵中ハれい先門後〳〵く
と申されさて内容へ申されけるハ
て兼相ゐるゆハ申をまゝきゆよ千
年目よい皮門もこまり申ゝ内わゝい
おされけるゝ 菖藤別伝

一 氏秋年生改事の時力ハれい妙寿院
小ゝ〳〵ゝて四書ゆ経ゆ奥義と問ひ
あゝい道春得庵等ゝ拓まて辞書と
講談せゝむ常ゝて八道集志学文集
と著ゝ家に藏む 近代諸士傳畧

肥後守藤原氏西（こちあき）の妻女西氏信（うちのぶ）左門氏族

なる長男なりしかの新二郎ふいし

のち左門と称せしまゝ氏包と名

乗り慶安四年十二月従五位下肥後守

小叙任し寛文十一年家を継ぎ天和

二年十二月従四位下に叙せられ貞

享元年六月七日五十八歳にて卒

せり